

のプロの漫才師をホームカミングデーで招きましたよ。

理事長 あれは楽しかったよね。

小川 実はマンドリンクラブの方から「発表する場が欲しい」と要望が上がっており、それならホームカミングデーでどうでしょうか、とアイデアを出した次第です。このように同窓会にご連絡いただければ、活動や発表に際し、お祝いの花を贈ったり場を提供したりいろいろ協力できるかと思えます。こうした機会や場を設けることで、同窓生どうしのつながりが広がればと。そして最初に申し上げた、連絡が取れない住所不明者の減少につながってほしいと思っています。

自治体との連携を

より強くし

地域を支える大学へ

次に、名古屋学院大学が来年50周年を迎えるにあたり、理事長と学長よりお言葉をいただければと思います。まずは理事長から。
理事長 来年創立50周年という節目を迎えるにあたり、大学の将来ビジョンを社会に示し、中部地区で存在感のある大学を目指したいと考えています。

記念事業としては、開講7年目を迎える名古屋キャンパスに50周年記念棟（新校舎）を建設します。これにより少人数制のクラスで学生一人ひとりに細かく指導していくという目標もクリアできると思います。

まだまだ女子学生が少ないので、女性を意識した施設の充実も図る予定です。さらに瀬戸キャンパスでは体育館のリニューアル工事を行い、さらなる教育環境の整備を進めます。

その他、創立記念式典、講演会、祝賀会といった多彩な行事を予定しています。式典は来年10月25日（土）に決まりましたので、同窓生の皆様にぜひご参加いただければと思います。

学長はいかがでしょうか。

学長 本学は1964年に経済学部のみから科大学として開設し、今年、新たに法学部を加え、6学部10学科、2研究科5専攻の大学となりました。現在の学生数は5425名、累計卒業生数は4万2296名に上ります。今後も社会や時代のニーズに応えるため、さらに学部学科の新設や再編を進めることを計画しています。

また、大学としてどういう人材を育てる



同窓会 副会長
安藤 恵二

同窓会 広報委員長
脇田 芳徳

かということですね。

ますと、昨今はグローバル時代にあり、また最近では地域と世界を繋ぐグローバル化ということも言われています。どこに生活拠点を置こうが、世界規模で物事を考え、その地域で活躍できるような人材を育てていけたらと考えています。そのため

に大学が用意できるのは学びの機会、チャンスです。例えば3・11以降のボランティアもそうです。今年の夏も100名前後が東北に行っています。留学や資格取得にチャレンジするのもそうです。いろんな仕掛けを用意し、気づきの機会を与えていけたらと思います。そして地域と連携し、地域づくりにますます貢献していきたいですね。

小川 名古屋キャンパスは熱田区との連携がうまくいっているようですね。

理事長 地域貢献で言いますと、文部科学省（以下文科省）が掲げる「地（知）の拠点整備事業」があります。自治体と連携し、地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を国が支援するというものです。

学長 文科省によれば、現在日本にある783の大学のうち、地域を支える大学ではないと将来生き残れないといえます。



理事長 ええ。それでいくと、本学の瀬戸キャンパスでは、49年前から教員たちが瀬戸の地場産業の研究などをかなりやっています。地域に貢献していたのです。実は本学は文科省が50大学を選び、年間5000万円を5年間補助するという、「地（知）の拠点整備事業」というコンペに応募しています。先日木船学長が文科省へ行かれました。応募数300近く。そのうち一次審査、書類審査を通った100ほどの大学がヒアリング審査を受けましたが、それに残っています。

学長 ありがたいのは瀬戸市、名古屋市の協力です。熱田区の区長さんと瀬戸市の課長さんが一緒にヒアリングに行ってくださいましたね。地域との連携の強さをアピールできたと思います。文科省の印象も違ったはずですね。
安藤 それはすばらしいですね。

学長 大学が地域の皆さんに育ててもらっているということですね。学生たちは校内でただ講義を聞いているだけじゃない。地域社会から教わっていることも多い。キャンパスを開放し地域の方がランチに訪れる、校内を散歩する、そういうことも大学として大切ではないかと。あとは防災拠点でもありますから、今後も地域との連携を密にできればと思っています。
ありがとうございました。

※「地（知）の拠点整備事業」については、後日、文科省より正式に採択の通知がありました。